

ノートに書いた文字を消しゴムで消そうとして紙がぐしゃっとなってしまう・・・1年生の最初の頃はよくあることです。ですが、ほとんどの子どもがだんだん上手に消せるようになっていく中、2年生になっても消しゴムで消すのに苦労している子どもの姿は通常級でもちらほら見かけます。

「消しゴムで消す」という行為は、「消す範囲を目で見えて確かめつつ、適度な力で消しゴムを紙に押し当てながら上下左右に動かすと同時に、もう片方の手で紙をしっかり押さえる」という2つ以上の動作を同時に行う協調運動が必要な動作になります。この協調運動が苦手な子どもにとっては、「消しゴムで消す」という行為一つとっても、学習する上でのストレスや集中の妨げになっているのかもしれませんが。

また、国語の音読で行の読み飛ばしがあったり、算数で直定規や分度器の目盛りが上手く読めなかったりする子どももいます。その原因はいくつか考えられますが、一つには視機能の弱さが挙げられます。これは、単純に細かいものを見ることが苦手というだけではなく、線の長さや傾き、形の大きさなどの視覚情報を頭の中で処理する力（視知覚）も関係してきます。

こうした協調運動や視機能に弱さがある子どもの学習上の困難さが、文房具の工夫一つで改善されることがあります。消しゴムの例で言えば、私は1年生の学級通信などで、「小学生用」または「濃い鉛筆用」と書かれた消しゴムを使うことを保護者に薦めています。例えば消しゴムのベストセラー「MONO」などは、狙ったところを細かく消せ、消しくずの量も少なめな使いやすい消しゴムです。しかし大人にとっては使いやすくても、小学1年生にはやや硬めで扱いづらいことがあります。それに対して「小学生用」などの消しゴムは、小さい力で消すことができ、紙がぐしゃぐしゃになることも少なくなります（その代わりに、消しくずがバンバン出ます）。



コクヨ・小学生用消しゴム

また、私が担任をしていた1年生のAさんの保護者から、2学期になって、「音読の宿題を苦にしている」という相談がありました。そこで、リーディングルーラー（色付きの透明な定規のようなもの）を試しに使用してもらったところ、教科書にルーラーを乗せた途端、Aさんが「読める！」と叫んだことがありました。そこで保護者と相談した上で、いくつかの色のルーラーを家に持って帰って試してもらい、一番読みやすいと感じた色のルーラーを買っていただくことにしました。Aさんは、しばらく国語の授業や家庭での音読の宿題の時に使っていましたが、2年生になってからは特に必要としなくなったようでした（ただし、漢字の習得の難しさなどの課題は今も残っています）。

音読の苦手さは、音韻処理の力なども関わってくるので、これだけで改善するものではありません。ですが、文房具の工夫一つで学習する上での負担が軽減することはあると思います。ということで、身の回りの文房具の工夫の例をエピソードも交えて紹介したいと思います。

## ① 太芯シャーペン

普通のシャーペンは芯の太さが 0.5mm ですが、最近は 0.7mm や 0.9mm、一番太いもので 1.3mm のものが売られています。理由ははっきりと分からないのですが、鉛筆の代わりにこれを使うことで、書くことの負担が減ると感じる子どもがいます。おそらく筆圧のコントロールに関係するのかもしれませんが（一般的には、シャーペンよりも鉛筆の方が小学生には適していると思いますが、こちらの方が向いている子どももいるということ）。



ただ、ほとんどの小学校ではシャーペンは禁止で、それには理由もあるはずですが、ですので、太芯シャーペンを使うことを無制限に認めるのではなく、その子にとっては必要だということを保護者も含めて確認し合い、必要な合理的配慮として認められる場合に限るようにするのが良いと思います。また、クラスの子どもたちへの説明も必要かもしれません。

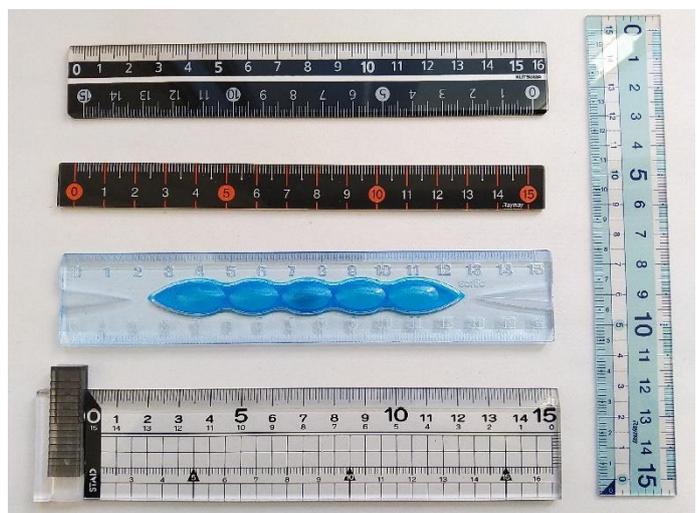
写真の太芯シャーペンは、六角形で見た目も持った感じも鉛筆に近いので、本校では学校で使う場合はこれに限定しようということになりました。一応、1.3mm が低・中学年用、0.9mm が中・高学年用となっていますが、これは本人にとっての使いやすさにもよると思います。両方とも、0.5mm のものと違い、とめ・はね・はらいも鉛筆と同じように書くことができます。

2年生の B さんは、やはり保護者から「漢字や日記の宿題に時間がかかり苦労している」という相談があり、太芯シャーペンを使ってみることを提案しました（漢字の学習は道村式を取り入れています）。B さんは使いやすさを感じながらも、認められていないものを教室で使うことに抵抗感があったようで、保護者と相談して家で宿題をする時に使うようにしました。結果、漢字の宿題の負担はだいぶ減ったそうです。

## ② 直定規

定規に鉛筆を当てて決められた長さの線を引くという動作は、消しゴムで消す以上に協調運動が苦手な子どもにとっては難しい動作です。最近よく売られるようになってきましたが、裏にノンスリップ加工がしてある定規は、指で抑える力が弱くても、線を引く時にずれてしまうことがあまりありません。

また、2年生の「長さ」の単元で初めて使う竹ものさしは、数字が書いてないことも



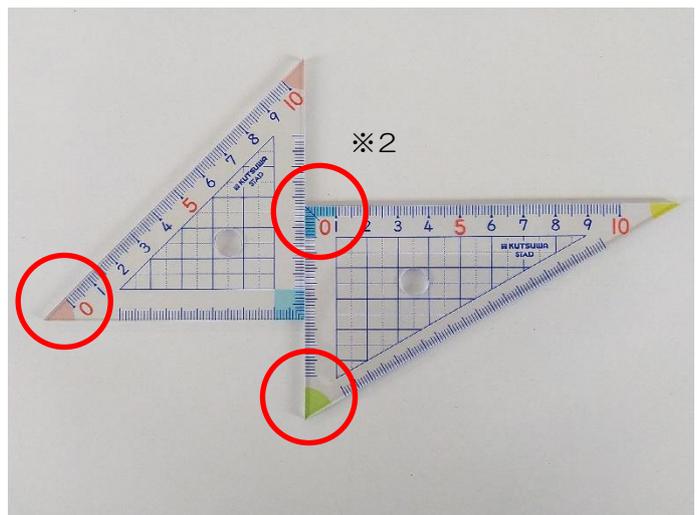
あって、子どもによっては目盛りを読み取るのが難しい場合があります。もちろん、端から目盛りが

始まるので長さを測りやすいことや、数字に頼らず目盛りを読むことで数直線の学習に繋がる素地を養うなど、竹ものさしを使う意義はあるので、最初からアクリル定規を使うことは望ましくありません。ですが、子どもの状況を見ながら、少し早めにアクリル定規を使ってみることは良いかと思えます。アクリル定規にも、ものさしのように端から目盛りが始まるもの（0スタート）や、白と黒のコントラストで目盛りや数字が見やすいもの、1mm～4mmと6mm～9mmの目盛りの長さが違う※1ことで、読み間違いを少なくするものなど、いろいろな工夫がしてあるものが増えてきました。どれが一番ということはないので、いろいろ試してみて、子どもが「これが使いやすい」と思うものを選ぶのが良いと思います。本校では、職員室の机の上に先生方に自由に試して頂ける文房具等を置くコーナーを設けて、気になる子どもに試してもらえるようにしています。また、私が担任したクラスが1年生から2年生に上がる時には、同じ学年の先生と相談し、学年費でノンスリップ加工がしてある直定規を人数分購入することにしました。

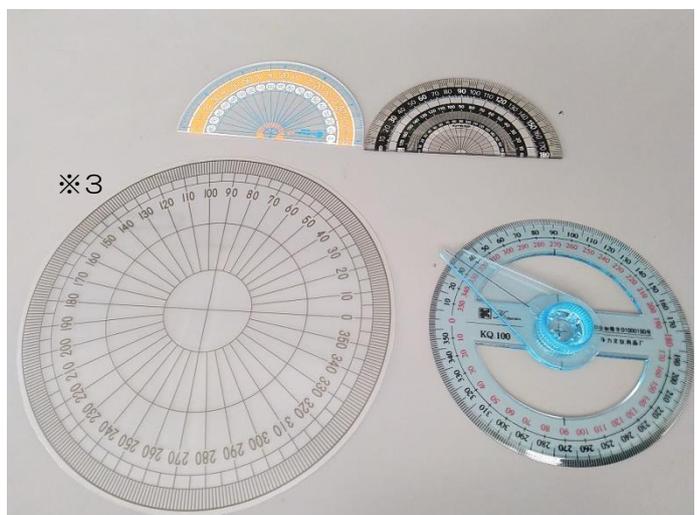


### ③ 三角定規・分度器

2学年の「三角形と四角形」の単元では、紙を2回折って直角を作ったり、教科書やロッカーなど身近な直角を見つけたりします。そして、3学年になって「1つのちょう点から出ている2つの辺がつくる形」が「角」であることを学習しますが、この角の概念の理解が難しい子どもがいます。おそらく、辺やちょう点は触って確かめることができるのに対し、角はそれが難しいことも理由としてあるのかもしれませんが。写真の三角定規は、カドに色付けされていることで視覚的に角を理解しやすいようにデザインされています。※2 また、これも端から目盛りが始まっているので、4学年の「垂直・平行と四角形」の単元で、決まった長さの垂線や平行線、四角形の作図がしやすいと思います。



次に、4学年の最初に学習する「角とその大きさ」の単元では、分度器の測り方の手順に戸惑う子どもがいます。また、角をなす2つの直線のうち1つの直線が角度を変えながら動くイメージをもてない子ども



は、120° と 60° のどちらかが分からないこともあります。右の分度器は、直定規と同じように底辺の余白がないものや、見やすいコントラストのもの、左右両方からの角度の目盛りがあるものなどです。これも、子どもによって使いやすいものは異なると思います。他にも 180° より大きな角度のイメージがもてない子どもは、360° の「全分度器」を使うことも有効かもしれません。これは文房具店ではあまり見かけることはありませんが、ネットで購入したり自作したりすることもできます。写真の左下の全分度器※3は、書籍『特別支援教育はじめのいっぽ！算数のじかん』（井上賞子・杉本陽子共著 Gakken）に付属する CD-ROM に入っているデータから、OHP フィルムシートにインクジェットプリンタで印刷して作ったものです。

#### ④ はさみ

知的障害学級の子どものはさみの使い方を見ていると、紙に対してはさみを垂直に当てて切ることができなかつたり、紙の方を上手に動かせなかつたり、刃を閉じきらずに切り進めることができなかつたりと、様々な姿があります。一方、通常学級の中にもはさみが苦手な子どもがいます。共通して言えるのは、やはり刃を閉じる（切る）動作よりも、開く動作の方にぎこちなさが見られること。右のはさみは、ハンドルと



支点の距離を近く、通常のはさみよりも少しの動きで刃が大きく開く工夫がされています。また 4 本指が入り、人差し指を固定するひっかけりがあるのも特徴です。一見地味ですが、私の担任する知的障害学級の子どもは、これを使うことではさみの使い方が上手になりました。

#### ⑤ 糊

ほとんどの小学校では、アラビックヤマトなどの液状糊を一人一つずつ持っているかと思います。液状糊は乾きが早く接着力も強くて、特に図画工作で厚紙を貼るには最適な糊ですが、これも「糊が出る量を指先に込める力で調節しながら塗る」という難しい動作が必要になります。学習問題が書かれた紙をノートに貼る時など、いつも糊が出過ぎてベタベタにしている子どももよく見かけます。そんな子どもには、図画工作以外で紙を貼る活動をする際は、スティック糊を使うのも良いかと思



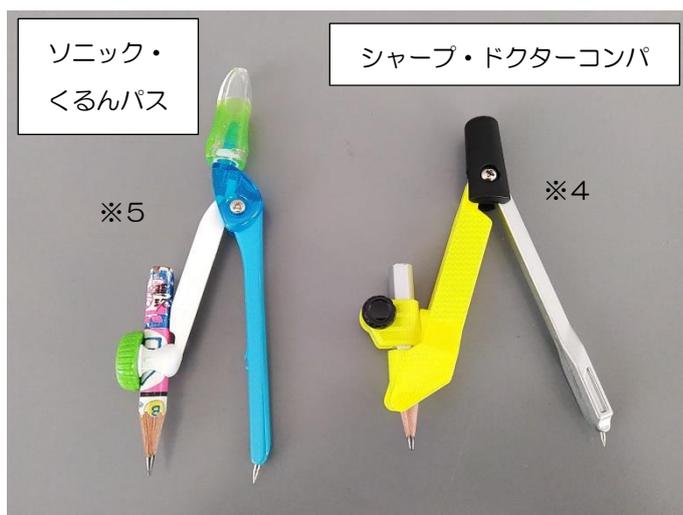
ます。スティック糊の中でも、いわゆる「シワなし」タイプのは、貼り直しもでき、薄い紙同士をきれいに貼り合わせるのに適しています。また、青や紫などの色がしばらくすると消えるタイプのは、塗った場所が視覚的に分かりやすいので、紙の外側に沿うように塗ることが課題の子どもに適していると思います。また、スティック糊も難しい場合には、最近は大いぶん安価になってきたテープ

糊を使うのも手だと思えます。

ここで、「その子にだけ違う糊を使わせるのはどうか」ということについて考えてみたいと思います。確かに何も手立てを講じなければ、他の子どもが羨ましがるといえるようなこともあるかもしれませんが、私は、低学年のうちから「苦手なことは誰にでもあって、みんなと違う方法でやったり違うものを使ったりすることは、特別なことじゃないんだよ」というメッセージを子どもたちを送ることは大切だと思っています。普段は液状糊を使っても、算数や国語の授業で紙をノートに貼る時だけその子にテープ糊を渡して使わせる、ということも合理的配慮の範疇ではないでしょうか。

## ⑥ コンパス

3学年の「円と球」の単元で初めて扱うコンパスも、苦手な子どもが多い文房具の一つです。教科書でも最初に鉛筆と針の先の高さが同じになるようにコンパスを開くことや、手首を手前にひねってから円を描くことを学びますが、言葉の指示だけではなかなか伝わりにくかったり、定規による作図以上に複雑な協調運動が必要だったりするため、子どもによってコンパスの扱いに慣れるのにかかる時間はだいぶ差があるかと思えます。



特徴のあるコンパスを2つ紹介します。右のコンパス※4は、自動中心器（どのように開いても鉛筆と針の先の高さが同じに仕組み）付きであることと、軸足（針側）が金属製で重たくブレにくいこととの他、つまみが太いことが特徴です。つまみが太いと、指でねじる回転数が減るので円を描きやすくなります。もう一つ、左のコンパス※5はかなり特徴的で、つまみの上に可動式のキャップを被せることで、指をねじらずに持って動かすだけで円を描くことができます（極端に言えば、キャップを掌で握っても円を描くことができます）。ただし、普通のコンパスに慣れた人には逆に描きづらく感じるので、あくまで普通のコンパスでは上手に描けない場合に使うようにした方が良さそうです。

## ⑦ リーディングルーラー（魔法の定規）

冒頭でも紹介しましたが、機能は主に2つです。1つ目は、ガイドを読む行に当てることで、どの行を読んでいるかが分かりやすくなることです。スリットの入ったシートなどを自作しておられる先生方もいらっしゃると思いますが、それと比べると、字の大きさや行間が変わっても対応できるのがメリットです。

2つ目は、色で光の波長をコントロールして読



みやすくすることです。読み書き障害の人の中には、白地に黒という教科書のコントラストが見づらく、人によっては文字が浮き出たり動いたりして見えることがあります。弱視の人が黒字に白が見やすいように、紙の色を替えることで読みやすさが全然違う人もいます。私が出会った子どもの中で、色によって本当に見やすさに変化がありそうだったのは、冒頭で紹介した A さんだけですが、試してみる価値はあるかもしれません。また最近、ASD の特性である感覚過敏との関連が指摘され、「アーレンシンドローム」などと呼ばれることがあります。また通常の医療機関では診断されにくいのが現状ですが、これを試してみて見やすさが激変するようなら、その可能性があるのかもしれない。

### ⑧ シリコンキー付きリコーダー

文房具ではありませんが、微細運動の苦手な子どもにとって大きなハードルになるのが、3 学年になってからのリコーダーです。穴を手探りで隙間なく塞いだり開けたりすることを繰り返すことは、指先の不器用な子どもにとっては至難の技です。

写真上のリコーダー※6は、穴の一つ一つにクラリネットのようなシリコンキーが付いていて、ボタンを押すような感覚で穴を塞ぐことができます。輸入品ですが、値段

は普通のリコーダーより若干高い程度 (Amazon で 2,000 円位) です。指で穴を探る必要もなく、軽く押すだけで完全に穴が塞がるので、手先が不器用な子どもでも指使いの負担が少なくなります。またジャーマン式なのでバロック式に比べ「ファ」の指使いも楽です。

他にも、穴の位置を指で探りやすくするために貼るシール※7も 1,000 円程度で市販されています。また、写真下のリコーダー※8は、穴に 100 均ショップで売っている「魚の目パッド」を貼っています。私が担任する知的障害学級の C さんは、通常のリコーダーが難しく、シリコンキー付きリコーダーも試しましたが、魚の目パッド付きの方が使いやすかったようで、音楽会でもこれを使って演奏しました。



### まとめ

定期でうまく線が引けなかったり、分度器の目盛りを読み取れなかったりする子どもに対し、ちょっとした配慮や工夫をすることで、その苦手さが改善される場合があります。市販の特別なものを使うことは、ともすれば安易な方法とも捉えられがちですが、「試せるものは試してみる」という発想の転換も必要かもしれません。子どもにとっても、自分に合った使いやすさのものが見つかったという体験は、将来、自分の苦手さを補う手段を自ら探そうとする力にも繋がるかと思います。既存のやり方に囚われない柔軟な姿勢が、私たちには求められているのではないのでしょうか。